

しらの 核心

第5回

今そこ（底）にある問題

（取材協力：社団法人レジャー・スポーツダイビング産業協会）

先日、町内会の集まりに参加した折、ひょんなことからポイ捨ての議論になりました。我が街は6年ほど前から路上喫煙の禁止条例がしかれています。人通りの多い商店街や駅前のロータリーなどに喫煙エリアが整備されたおかげで吸い殻のごみはずいぶん減った印象を受けるのですが、一方で、街の暮らしが快適になったかという、そうは感じません。野外の喫煙コーナーは時折ものすごい量の煙を周囲に拡散させ、通行人の新たなストレスのもとになっているからです。

「そもそも、なんで歩きたばこが禁止されたのかな。」「やっぱりポイ捨てを減らしたいからじゃないの。」「でも、ポイ捨てって実際どんな影響があるのだろうか。」

そんなふうには議論は展開していきませんでした。

筆者は面識がある数人の若者をつかまえ、捨てられたごみを放っておいたらどうなると思うか、ストリートにたずねてみました。すると、「街が汚れる」という意見が真っ先に出て、皆が一斉に頷きました。それから、「火のついたタバコやペンなんかは怪我のもとになるから危ない」、「生ごみが捨てられたら臭いものすごいだろうね」、「カラスが増えるんじゃない?」といった意見がありました。さらには、「マナーの問題でしょ。マナー違反を放っておくと犯罪が増えるよ」。そんな言葉が中学生の少年から発せられたのが意外でした。



街のごみはどこへ行く？

若者との交流は楽しいひとときでしたが、1つだけ残念だったのは、ポイ捨ての影響に対する彼らの想像が“街”を出ていかなかったことです。つまり、彼ら

の意識の中では、自分たちの日頃の行動と、その結果としての川や海への影響がリンクしていないのです。

先ほどたばこのポイ捨てが減ったという個人的な印象を記しましたが、正直いうと、今でも道路の側溝に吸い殻を投げ捨てる人の姿を目撃することがあります。一部とはいえ、大人ですらこういう行動をとるのですから、子供たちの理解が深まらないのも無理のない話かもしれません。「側溝に落ちたタバコはどうなると思う?」。そう水を向けても、みんな答えに自信がないからでしょうか、口ごもって首を傾げるばかりです。「側溝は川につながっているから、雨が降るとごみは川に出て、いずれは海を汚すことになるね」。そう言った時、ハッとした表情を浮かべたのは一人だけで、他はあまりピンときていない様子でした。「(埼玉には)海なんてないよ」。そう切り返してきた少年の言葉は冗談めいていましたが、半分は本気だったのかもしれない。

さて、海や湖の中の様子を一番よく知っているのは誰でしょうか。それは恐らくダイバー（潜水士）です。水に潜ることを仕事や趣味にしているダイバーの皆さんが、海底や湖底のごみ拾いのボランティアに精力的に取り組んでいる実態は一般にあまり知られていません。路上のごみは誰にでもその気があれば拾うことができます。しかし、海や湖に沈むごみとなると話は別です。陸と海とでは清掃の担い手の数が圧倒的に違うのです。

社団法人レジャー・スポーツダイビング産業協会の専務理事、河合正典氏によると、同協会が行っている清掃活動には年間延べ約2100人のダイバーがボランティアで参加しているそうです。日本本土の沿岸域が



ダイバーによる海底の清掃

外周1万9000kmですから、とても十分な数とはいえません。

河合氏によると、レジャーとしてのダイビングが認知されはじめたのはここ30年くらい前の話だそうです。それ以前は、ダイビングといえば日常からかけ離れたアドベンチャーの世界でしたが、近年になって道具が発達し、それと同時に潜る技術（ダイビングスキル）の指導・教育プログラムが確立されたことから、一般層のファンの取り込みが進んだのだといいます。特に大きな転機となったのが80年代後半に迎えたバブル景気です。この頃の国民は新しい余暇の楽しみ方に関心を寄せており、その中で非日常を壮大なスケールで味わわせてくれるダイビングにスポットが当たったというわけです。

「ダイビングの愛好家を獲得することは、海底の問題に気付く同志を増やすことでもあります」。河合氏の言葉が印象的でした。

「東京湾に潜る人がなぜいないのか。答えは簡単です。潜ってもちっとも楽しくないからです。なにせ5メートル先が見えない濁った海ですから」。河合氏は、近年、東京湾がきれいになったと喧伝されることについて、一面的には正しいと理解を示しつつも、海の中の問題が置き去りにされている現実に危機感を募らせているといいます。

「海底の実態を広く知らしめなければ、本来の海は戻ってこない」。その想いを行動に移すため、協会が始めたのが交流支援事業です。これは、スノーケリングや海の生物観察など家族や学校で参加できるさまざまな体験プログラムを通じ、子供たちに海への興味を深めてもらう、いわば海の教室です。そしてこの教室では海との触れ合いだけでなく、クリーン&セーフティについても学んでもらっているといいます。

クリーンは文字通り清掃活動のこと。前述したように街から流れ出るごみについてその存在を知ってもらうとともに、海岸のごみの回収などを通じ、海の自然を守ることの大切さを子供たちに心と体で理解してもらおうのだそうです。そして一方のセーフティ（安全）ですが、この教育が今、とても難しくなっているそうです。河合氏が昨年の経験談を話してくれました。

「子供たちを水に入れないでほしい。海の教室に申し込できたある小学校からの条件です。矛盾していると思いませんか。海に入らずに、海を学ばせろというのですから。このときは話し合いの結果、足のくるぶしまで浸からせることで特別にプログラムを組んだのですが、これではやはり体感学習にはなりません」。

もちろんこのようなケースは稀ですが、一方で、昨年の東北大地震以降「津波は怖い」というイメージが増長され、海の教育に大きな影を落としていることも

事実のようです。「危険だ」、「近づくな」。こんな子供への指導が増えつつあるのだといいます。確かに、自然は時として人間の脅威になります。しかし「だから近づかない」では、人が自然と共存して生きていくための力を育むことはできません。もし仮に「海に近づくな」という教育を押し通すというのであれば、親や先生方はどんな言い訳をして子供たちに魚を食べさせるというのでしょうか。まさか、「将来漁師にだけはなるな」とでも言うのでしょうか。そんな馬鹿げた話はありません。



体験を通して心を育む

河合氏が指摘するように、一番は、体験を通して子供たちの心を育てること。海を愛する心さえ持てれば、子供たちは海への影響を自ら考え、自発的な行動を取るようになりますし、また、おのずと安全をまもる術を身につけるはずで。

レジャー・スポーツダイビング産業協会の環境への取り組みは地道に実を結び、今では様々な団体と連携して海の清掃活動が展開されるようになったといいます。シーカヤック（カヌーのような小舟）の団体との連携もその1つです。実は岩場の入り組んだ海岸は、清掃ボランティアにとって最大の難所でした。というのも、ごみを海面まで拾い上げても、船が近くに入れないため、回収の効率が悪かったのです。そこで、協力を申し出てくれたのが近年交流を深めてきたシーカヤックの愛好家たちでした。彼らが手を差し伸べてくれたおかげで、海底から海面、海面から陸へのごみのリレーが完成したのだそうです。

河合氏いわく、同協会の次の目標は「公園、下水道、水道などの行政関係者や利用者をつなぎ、もっと大きな輪で海的环境を話し合い、一緒に活動できる場を作ること」。その時に大切なのは夢のある目標を共有することです。「東京湾にダイビングスポットを作る」という発想がとても面白いと感じました。

（筆者：中山 勲）